



特集
“好きなことを始めよう”



佐賀新聞文化センター講座紹介

み
なさんは、佐賀市白山の複合施設「エスプラッツ」が佐賀新聞文化センターの文化講座や生涯学習の拠点になっていることをご存知でしょうか。施設の2、3階にたくさんある教室があり、さまざまな分野の先生方にご協力をいただいで音楽、舞踊・ダンス、美術などの約350講座を開いています。

私たちはこの3年あまり、新型コロナウイルスの感染拡大により、暮らしの中で厳しい制限を余儀なくされてきました。感染収束に向けた闘いは続きますが、5月8日から新型コロナウイルスの感染症上の位置づけが現在の2類から季節性インフルエンザと同じ5類に移行することが決まっております、人の動きは一気に活発化しそうです。

これまで感染予防のため、好きなことを諦めていたという方もたくさんいらっしゃると思いますが、「人生100年時代」といわれるいま、学び始めるのに遅いということはありません。この春、新たなチャレンジとして学びの一步を踏み出してみませんか。今回の特集では、佐賀新聞文化センターの5つの人気講座を紹介いたします。

01 下村 千鶴子先生 ハワイアンフラ上級
“アロハの心”を大切に

スローテンポのハワイアン音楽に合わせて先生と生徒さんが一緒に踊られています。指先まで意識した美しい動きと穏やかな笑顔が印象的です。「ハワイアンフラは中高年の女性にとって最適です。激しくない柔らかな全身運動なので、体への負担が少なく、さまざまな振り付けを覚えるので頭の運動にもなります」。佐賀新聞文化センターなどで講師を務めている下村千鶴子先生は、年を重ねることにその効果を実感しています。

下村先生にとってフラとの出会いは運命的でした。定年退職後、家族とハワイ旅行に出掛けた時、その華やかな衣装や柔らかな踊り、みなさんのすてきな笑顔に「あっ、これだ」と心がときめいたそうです。日本に戻ると、すぐに教室に通い始めました。練習を重ね、70歳の時に西日本ハワイアンフラ協会の講師資格を取得。2011年にはモク・オ・ケアヴェエ世界大会の日本予選会にチームで出場し、4位入賞を果たされています。

フラは思いやりや優しさ、謙虚さなど「アロハの心」を大切にし、その思いをハンドモーションや表情で伝えます。生徒のみなさんもそのことをよく理解されており、月2回の教室の日を心待ちにされています。フラを学び始めて約15年になる佐賀市の大隈洋子さんは「楽しく体と頭を動かしています。練習の合間にみんなでおしゃべりできるのも楽しみ」と話します。いまは発表会に向けて準備中ですが、きれいなフラの衣装に身を包んで舞台上立つと心が躍るそうです。

コロナ前、下村先生らは定期的にハワイに行き、現地の先生から直接指導を受けていました。一方、現地の先生が日本に教えに来てくださることもあったそうです。「みんながハワイに行ったり、ハワイから先生に来ていただいたり…。そんな交流が早く再開できれば」と夢を膨らませています。



講座見学などのお問い合わせは…
佐賀新聞文化センター
カルチャー教室 TEL: 0952-25-2160



講座一覧はHPから！
佐賀新聞文化センター



青春の思い出・
フォーク大全集

03

浦郷 啓介 先生

青春時代に タイムスリップ



かぐや姫、吉田拓郎、井上陽水……。年配の方は1960〜70年代のフォークソング全盛期の熱気を覚えていらっしゃるでしょうか。「青春の思い出・フォーク大全集」は、数ある文化センターの講座の中でも根強い人気を誇っています。講師の浦郷啓介先生のギター伴奏に合わせて、みんなで当時のヒット曲を歌い上げます。輝かしい青春時代に一瞬でタイムスリップすることができます。

浦郷先生がフォークに熱中するようになったのは、横浜での大学時代です。バイトをして自前のギターを入手。同級生と近くの女子大に足を延ばして女子大生2人をスカウトしました。当時人気だった「赤い鳥」と同じ男3人女2人の5人組のグループとして活動し、横浜のフォークコンテストで3位入賞したこともあるそうです。講師を始めて20年以上になります。

講座は2時間で、最初の40分間で新しい曲を教えます。この日は山本コウタローとウィークエンドの「岬めぐり」などでした。少し休憩を挟んだ後は、おさらいの曲をほぼノンストップで歌っていきます。浦郷先生がリードされ、練習を繰り返すことに歌声が洗練されていくのが分かります。「フォーク全般に加え、狩人の『あずさ2号』など歌謡曲も選んでいます」と浦郷先生。受講生のリクエストを取り入れることもあるそうです。

受講生はみな同世代で同窓会のような雰囲気です。「歌うと気持ちウキウキ。青春時代のことを思い出します」「歌詞がドラマみたいで素晴らしい」と、みなさん一様に声を弾ませます。「フォークのよさは、歌っている人も歌詞も素朴なところ。四畳半一間の世界のイメージがあるかもしれない曲もあります」と浦郷先生。フォークから恋愛や生き方を学んだという人も多くは、人生の記憶を呼び起こすのにもピッタリの講座です。

楽しく吹こう複音ハーモニカ
やさしい複音ハーモニカ

02

原 克江 先生



みなさんは、佐賀県を拠点に活動するハーモニカ合奏団「コン・カローレ佐賀」をご存知でしょうか。全国大会でグランプリを受賞するなど輝かしい実績を重ねられています。その指導者が原克江先生です。佐賀新聞文化センターでは、初級者から上



級者までを対象に四つの教室を開かれており、先生を慕って多くの方が通われてきています。ハーモニカといえば、小学校の音楽の時間を思い浮かべる方がいらっしゃるかもしれませんが、幾重にも重なる合奏の音色の

合奏の楽しさ感じて

美しさに驚かされます。哀愁を帯びた繊細な音色が胸の奥までしみ込んできます。

中学校の音楽教師だった原先生は42歳の時、自ら希望して養護学校（現在の特別支援学校）に転任。子どもたちに音楽を通して生きる力を養ってほしいと、一人一人に歌や器楽演奏の楽しさを伝えました。退職前に楽器店からの勧めで指導者養成講座を受けたことがきっかけとなり、ハーモニカ指導者の道へ。「私自身はおもちゃと思っていたので、最初はどんなのかなと思いましたが、ハーモニカの素晴らしさや可能性を感じ、追求したいと思いました」と原先生。幅広い年齢層を指導し、その演奏力を最高水準に高めた功績が認められ、2016年には日本ハーモニカ界の最高の栄誉である佐藤秀廊賞を受賞されています。

ハーモニカ演奏には健康にも効果もあるようです。腹式呼吸が身に付き、背筋が伸びて姿勢がよくなります。日本一の原先生と一緒に演奏したいと福岡市から通ってきている南隆洋さんは「音浴」というのが、ここに来ると温泉に入っている気分です。どんなに疲れていても生き返ります」と話します。腹式呼吸の効果で血圧も下がったそうです。

受講生のみなさんの今の目標は、7月2日のエスプラッツホールでの合同演奏会です。この3年間は新型コロナウイルスの感染対策で観客数を制限してきましたが、今回は通常開催に近づけそうです。圧巻なのは、4教室合同のアンサンブル。受講生約50人が一斉に演奏し、会場がハーモニカの音色に包まれます。原先生は「みなさんでお越しく下さい」と呼び掛けます。



ジュニア・大人の将棋

05 岸川 実 先生



いま将棋界の注目目は、史上最年少の20歳8カ月で六冠保持者になった藤井聡太さんのさらなる快進撃です。挑戦者として迎えた名人戦で先勝し、最年少七冠への期待も高まっています。「やはり藤井さんの影響力は特別です。6、7年前から将棋を学ぶ子どもが多くなっています」。佐賀新聞文化センターでジュニア・大人の将棋の講師を務める岸川実先生は、近年の将棋ブームについてこう説明します。

岸川先生は日本将棋連盟アマチュア四段の腕前で、佐賀新聞社が主催し、半世紀近い歴史を誇る「佐賀名人戦」の第1、2期の優勝者です。子どものころから競

技者として将棋に打ち込み、定年後は子どもや将棋を愛する人たちの指導に情熱を注いでいます。

最近、岸川先生にはうれしいことがありました。教室に通ってきている川本泰輝君（赤松小4年）と岡崎忠俊さん（佐賀大附属中1年）が、大人に交じって佐賀名人戦の予選を突破したからです。本選進出者は10人だけで、年間を通して総当たりのリーグ戦を重ね、古賀一郎第45期名人・鳥栖市への挑戦権を目指します。「普段指している人と違う感じがします。普通に強名人戦の西日本大会に挑むなど積極的です。」

教室を訪ねた日はミニ大会が開かれており、あちこちから盤面に駒を打つ音が響いてきました。教室の雰囲気は明るく、子どもたちの表情は真剣そのものです。

岸川先生には夢があります。それは自分の教え子からプロ棋士が誕生することです。全国には男子プロの空白地域があり、佐賀もその一つ。これまでプロがいなかった山口や岩手からプロが誕生するなど勢力圏は少しずつ変わってきており、「将棋を好きになればなるほど強くなれる。佐賀もそうなれば」と岸川先生。急成長を遂げる子どもたちに向き合い、そう願っています。

夢は佐賀からのプロ誕生



何もかも包み込む
優しい音色

マリンバキッズ
マリンバ趣味、中級、上級コース

04 池田 祐子 先生

何もかも包み込んでくれるような優しい音色がレッスン室に響き渡ります。「熱中できるものを探している方、何か音楽に触れてみたいと考えている方にマリンバは最適です」。マリンバの指導を始めて15年以上になる池田祐子先生は、穏やかな笑顔でこう話します。

池田先生がマリンバを本格的に始めたのは佐賀北高芸術コースに在籍していたときです。練習に没頭するようになり、多くの音楽家を輩出している洗足学園音楽大学の大学院修士課程を首席で卒業。広く演奏活動を重ね、第25回佐賀銀行文化財団新人賞や令和2年度県芸術文化奨励賞を受賞されています。

レッスンには子どもから70代まで幅広い年代の方が通われています。その中の一人、松浦莉桜奈さん（三田川小6年）は今年1月に神戸市であったKOB E国際音楽コンクールの小学生の打楽器部門で最優秀賞に輝きました。「初めての大きな賞。頑張ってきたよかった」と松浦さん。そのほかの子どもたちもマリンバが好きな努力家ばかりです。「音がきれいでいろんな音を表現できる」（兵庫小6年・富永柚菜さん）、「ノーマイスで弾けたらうれしい」（本庄小6年・坂口結人さん）などと話し、熱心に練習を重ねています。

大人の皆さんも演奏への熱意は同じです。すてきな音色を奏でると、心が浮き立ち、暮らした潤いも生まれるそうです。マリンバに出会って10年になる佐賀市の大川佳美さんは、影響を受けたご主人がギターを始めて2年で、「いつか2人でアンサンブルを奏でられたらいいね」と話し合っているそうです。

新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言が出された3年前は、レッスンが休止になり、リモートによる指導を余儀なくされるなど大変な時期もありました。「教室に通うことが日常だった人には、すごいストレスだったと思います」と池田先生。でも、そうした困難も乗り越え、対面で一緒に音楽を楽しめる時間が戻ってきました。先生に学ぶ子どもたちは敬老会でアンサンブルを披露するなどボランティア活動にも熱心に取り組んでいます。